

# 一筆描き

対象を観察する方法によって、表現が  
変化する。また、表現方法によって、  
観察方法が変化すること  
を理解する。

表現方法を指定して、新しい物の見  
方や新しい表現を発見する。

## 実施方法

2人ずつ向かい合って着席して、お互いの顔を描く。  
画材：A4 コピー用紙、鉛筆、ペンなど

- 1 自由にお互いの顔を描く。(5分間)
- 2 一筆描きでお互いの顔を描く。この時、一度置いた  
ペンは紙から離してはならない。(3分間)
- 3 一筆描きでお互いの顔を描く。2と同じくペンは紙  
から離してはならない。また、一度描いた線の上に  
線を引いてはならない。つまり、線が交差しない  
ように描く。(5分間)
- 4 丸描き。閉じる形（線の始点と終点が一致する）の  
みを使って描く。(3分間)
- 5 上から下に向かって描く。(3分間)

1 自由に描く (5分)

2 一筆描き (3分)

3 交差しない線 (5分)

4 丸描き (3分)

5 上から下へ (3分)



1

2

3

4

5



1

2

3

4

5



1

2

3

4

5



## 1 自由にお互いの顔を描く。(5分間)



上の2点は芸術に所属する学生が描いたものである。描き慣れた方法で対象を表現している。芸術以外の学生は、人の前で絵を描くことに消極的な学生も多い。これまでの美術教育の中では、対象となるものを上手に描くことを中心に教わっている。上手に描く事が苦手な学生にとっては、向き合ってお互いの顔を描きあうことは、苦痛でもある。しかし、本来表現とは自由であり、表現することが面白いと感じるようなきっかけを作りたいと考えた。そこで、一筆書き等の一定の縛りを設ける、対象を上手に描くことよりも各自の見方が表現として現れ、それが個性になる面白さを発見してもらうことを狙った。

## 2 一筆描きでお互いの顔を描く。

この時、一度置いたペンは紙から離してはならない。(3分間)



一筆書きは、目線と描線が一致する。見なければ線は進まない。

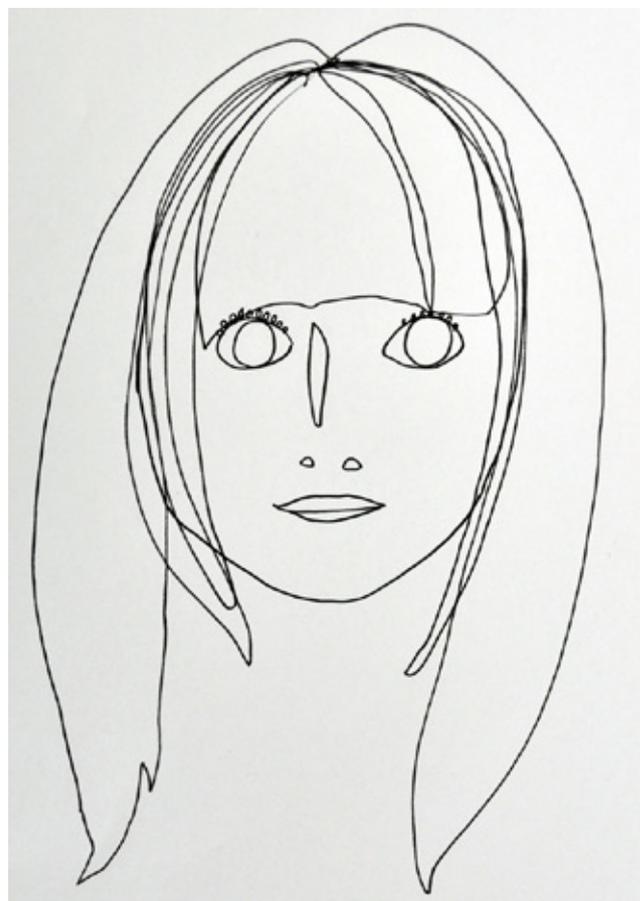
1での自由に描くドローイングは、普段の描き慣れた見方と方法で描く。そのことは、描く為に必要な情報を自分のやりかたで選択して描いているとも言える。そのため、観察がおろそかになり、慣れた手の動きで表現することもある。一筆書きは、根拠が無ければ筆を運ぶ事ができないため、よく対象を観察しなければならない。紙から筆を離さないというしほりを設けた理由はそこにある。その結果、観察の方法、見方や順序がそのまま絵に表れるため、それぞれ個性的な表現となる。一筆で描くこと、筆を紙から離さないこと、3分という時間で行うこと、といった縛りにより面白い表現を獲得できるという実感をもってもらうことができた。

**3 一筆書きでお互いの顔を描く。2と同じくペンは紙から離してはならない。また、一度描いた線の上に線を引いてはならない。つまり、線が交差しないように描く。(5分)**



**2**の方法より、さらに縛りを強くした。線が交差しないように描く。描写時間は5分として、細かな表情まで捉える様にした。**2**よりも縛りをきつくするという事は、さらに独特な表現を得るということである。例えば、写真は階調が多い程自然に近い描画ができる。画像処理ソフトでは、その階調を減らしコントラストの強い独特の表現を得る事ができる。個性的、独特な表現とは、縛りが強い程表れると言っても良い。ここでは、表現することの面白さに焦点を当てた。

#### 4 丸描き。閉じる形（線の始点と終点が一致する）のみを使って描く。（3分）



丸描きは、一筆描きとは異なる見方で描く。描く対象全体の中から、ひとつにくくる事ができる形を見つけ出し描いて行く。丸描きされた一つ一つが、重なり合い面白い表現となっている。特に髪の毛の表現は、奥行きを感じる。この手法はもっと複雑な対象を選ぶと、表現が広がる可能性がある。今回、5つの課題を設定した。丸描きをこの課題に入れたのは、一筆描きと比較対象できると考えたからである。丸書きによって出来た面を、塗り絵の様に彩色する事もできる。

## 5 上から下に向かって一筆で描く。(3分)



上から下に向かって一筆描きをする狙いは、縛りのきつい状況においても対象の全体を表現しようとする工夫を導きだすことにある。目や口は線で捉えやすい。一方、目や口を繋ぐ場所は線で捉えにくい。まっすぐ線を下におろすと、単調な線となり顔の有機的な表情が表現できない。そのような時、横から見たラインを使う者が多かった。一つの画面に正面から見た対象と、横から見た対象を重ね合わせて表現している事になる。キュビズム的な捉え方が自然と生まれる。

これまで紹介した事例は、縛りをきつくすることから個性的な表現が生まれる可能性を示唆するものである。農閑工芸では身近な「ありもの」を工夫してものを生み出す。逆に言えば、そこにあるものしか手に入らなかったため、作り方の工夫から優れた物が出来上がったと言っても良い。ここまでの事例では、縛りを設けた不自由なドローイングから、自由な表現が生まれた。

ここには5つの事例のみ紹介したが、教育の場で様々な応用が考えられる。例えば、筆、鉛筆などの画材を変えること。さらにヒモ、針金、粘度などの実材を用いて立体を作ることなどもあげられる。教える内容に対して、有効な限定・縛りをつくることで新しい教育方法を考える事ができる。